パトスの神話 ―3―

―ロシア・ナロードニキ覚書―

小田光雄

パッション　Passion

1. 殉教、受難（古義）
2. The Passion ―キリストの受難
3. 病気（古義）
4. 情念、情熱
5. 恋愛
6. 渇望の対象物

Ⅲ　ネチャーエフと革命

―〈悪〉

「まあ、お聞きなさい。ぼくらはまた新しい混乱時代を現出するのです。ぼくらが混乱時代を現出しうるということを、君は本当にしないのですね。ぼくらはそれこそ一切のものが根底からくつがえされるような恐しい混乱時代を現出するのです」（注1）

ドストエフスキー『悪霊』

わたしは次にカリャーエフと時代は相前後することになるが、カリャーエフと対極に存在すると考えられるネチャーエフ（注2）について考察しなければならない。ネチャーエフこそは、〈革命〉と云う絶対に接近する過程において、カミュの云う背理を極限まで押し進め、カリャーエフの〈愛〉に対して、逆に〈悪〉を選択することによって、パッションの凄じい軌跡を描いたのであった。私見では、その〈悪〉とはジル・ド・レエ・マルキ・ド・サド、ジャン・ジュネの延長線上にあると考えられる。

ロシア革命史の上を流星の如く横切っていったその生涯は、後世の人々から罵倒され、非難され、革命史の汚点として暗室の中に押し込まれ、その〈悪〉の創出した混沌は、人々の斜視からは逃れていない。ネチャーエフはあらゆる人々からの罵倒と非難の痕跡によってのみ歴

史に姿をとどめている。その二、三の例を上げてみよう。

〈彼は、狂信者と暴漢と下種との、比類なき、驚嘆すべき結合物である〉

（E・H・カー『浪漫的亡命者』）

〈ロシア革命運動の天際に妖星のような光芒を放った狂信者である〉

（荒畑寒村『ロシア革命前史』）

〈ネチャーエフはアナキストではなかった。むしろ彼は革命的独裁の信者であって、目標がすべての手段を正当化し、個人が社会における他のすべてと共に否定され、そしてテロリストの〈権威主義的〉意志が彼の行動の唯一の弁明となるあの忌むべき極限にまで、ニヒリズムをおしすすめた〉

（G・ウッドコック『アナキズム』）

ネチャーエフはチャイコフスキー団の人々のように熱烈に民衆を愛し、信じていたのでもなく、ゲルツェンのように浪漫的に民主主義を信じていたのでもなく、バクーニンのようになおいっそう浪漫的に人間性を信じていなかった。彼は〈革命〉を唯一絶対と考え、かつまたそれを実際に自らの行動の指標とし、その過程にあって生ずる混沌の中に、パッションを放射し生きたのであった。そしてその軌跡は如何なるものであったのか。

セルゲイ・ネチャーエフはロシアの小さな村に生まれ、卑しい素姓ではあったが、学問をおさめ、神学の教師となって、一八六八年革命の息吹きが満ちあふれたペテルブルグにやって来た。そしてたちまち学生グループの指導者となった。（注3）

しかししばらくしてネチャーエフは学生たちの前から姿を消してしまう。それから仲間の学生たちに彼からの手紙が届いた。それには、彼が逮捕されてどこか知らない牢獄に送られるところだと書いてあった。それから二カ月程たって、今度は脱走して外国に避難することに成功したと云う手紙が届いた。

これはネチャーエフの捏造に他ならない。ネチャーエフの裡にあって、かかる〈虚偽〉とはどんな意味を有していたのだろうか。これは彼の功名心のために行われたのではない。彼にとっては、〈革命〉と自己とは同一であり、〈革命〉を熱望するあまり、自己を単なる革命家として看做すことは不可能であったのである。〈革命〉

を推進する過程において、自己は常に歴史の主体者でなければならぬし、かかる〈虚偽〉によって、自己を一般の革命家達の位置から引き上げて、自己を神秘化、伝説化することが、必然的な意味を有することになるのである。そして〈虚偽〉は廻転を始め、ひとつの有限は突破され、常に無限へと他のものを腐蝕して行く。

ペテルブルグで学生たちがネチャーエフについて心配している時、彼は国境を越えてジュネーブに行った。そして無政府主義者として著名なバクーニンを訪れ、自分は「ロシア革命委員会」なるものの代表として、ペテロ・パブロ要塞を脱出して、スイスにやって来たと告げた。ここでも〈虚偽〉は突き刺さっている。他の人々がそうであるように、バクーニンもまた一眼見て、ネチャーエフの情熱・個性に魅了され、彼を「ボーイ」と云う愛称で呼び、友人にあてた手紙で彼を「神なき信者、言葉なき英雄」と称賛している。

こうしてネチャーエフは老無政府主義者の弟子として数カ月間（注4）を共にすごし、『大学の学生諸君に告ぐ』『ロシアの若き同志達へ』『大学・学士院・技術院へ』『革命問題はいかに自らを示すか』『革命の原理』『革命家の教理問答（注5）』等のパンフレットを書き、『人民裁判』と云う雑誌の創刊号を作っている。

ここでは悪名高き『革命家の教理問答』を主として取り上げて論じてみよう。ネチャーエフの〈革命〉に対する独自性、その〈悪〉とはこの中にあるのであり、また人々に非難と罵倒を浴びる原因もあるのだから。『革命家の教理問答』は、「革名家の自己に対する態度」「革命家の同志達に対する態度」「革命家と社会の関係」「教団の民衆に対する態度」の四つの部分から成っている。云わば革命家の存在論なのである。『革命家の教理問答』は云う。

〈革命家とは前もって死を宣告された人間である。革命家は個人的利害、利己的目的、感情、財産そして姓名すら持たぬ人間である。彼の利害のすべてはたった一つの利害、思想、情熱である革命に吸収されている。

〈革命家はすべての教義を嫌悪する。彼は科学の世界を拒否し、これを次の世代にゆだねる。彼の知るものはひとつの科学、破壊の科学である。

〈革命家は世論を蔑視し、世論の要求と表現の中に見られる現行する道徳律を侮蔑し、憎悪する。彼にとって革命の勝利に資するものは何ものも道徳であり、これを妨げるものは不道徳である。

〈革命家とは前もって死を宣告された人間である。彼

は政府、特権階級、および一般階級に対して仮借せず同時に彼らからも、自身に対する仮借を期待しない。常に彼は死を覚悟していなければならぬし、また拷問に耐え得る身心をきたえねばならない。

〈他人に対して厳格なる如く、自身に対しても厳格なることを要し、家庭生活に対する甘ったるい感情、友情、恋愛、感謝及び名誉と言ったすべては、革命のためというひとつの冷厳な感情で圧服しなければならない。彼にとって革命の成功という唯ひとつの歓喜、慰安、報酬、満足があるだけだ。彼は日夜、唯ひとつの思考、唯ひとつの目的、即ち容赦なき破壊を持たねばならない。この目的のためにはうまず冷酷に、彼は常に革命の敵を殺すようにしなければならない。

〈革命家はロマンチシズム、感傷、熱狂、誘惑は勿論個人的憎悪や復讐を禁じられている。彼はいついかなる場合も、自分の個人的意向にかかわりなく、革命的利害の要求するところを果さねばならない〉

『革命の原理』は云う。

〈われわれは殺りく以外の仕事のどんな仕事も認めない。しかしこの活動の形態が毒薬、ナイフ、ロープ等々、極めて多種多様であることを認める。この闘いにおいて革命はどのようなことも正当とする〉

『革命問題はいかに自らを示すか』は云う。

〈掠奪は、ロシア民族生活中もっとも名誉ある形式の一つである。ロシアで真剣に陰謀を企てるもの、人民革命を欲するものはその世界に行かなくてはならない。時期は迫っている。ステンカ・ラージンやプガチョフの記念日は近づいている。これらの人民の戦士たちを祝すべきときだ。みな祝祭にそなえよう〉

ここには、あの「心優しき殺害者たち」の友情と愛は断片も残されていない。友情、愛、道徳、倫理、秩序、習慣のすべては否定され、それらに換わって、略奪、破壊、殺人、裏切りの世界が顕現する。〈革命〉と云う絶対を前にして、〈悪〉は過熱し、その円環はとめどもなく拡大して行く。そしてその〈悪〉は徹底したストイシズムとシニシズムに支えられているのだ。

だが〈革命〉と云う〈未来の地上の愛〉の実現のために、その方法として〈悪〉を選択すると云うのは何と云

う逆説であろうか。ネチャーエフは〈悪〉のために〈悪〉を為すのではなく、〈愛〉のために〈悪〉を為すのだ。〈悪〉の混沌から〈愛〉を実現させるために。そして〈悪〉の無限の成熟によってネチャーエフは革命家として成長するのである。サルトルは『聖ジュネ』の中で苦々し気にこんなことを云っている。

《悪の体験とは、存在を前にして、みずからの特殊性をあらわにして見せる王侯的なコギトである》

そしてかかるネチャーエフの存在を支えるものは何なのか。それは「革命家とは前もって死を宣告された人間である」と云う意識である。ひたすら死を凝視し続けることによって、彼は革命家として高みに上昇する。パッションの帰結たる死の意識を発条として飛翔する。そして彼は〈革命〉の歴史の主体者として、また自己と〈革命〉の同一化を認識する。そして〈革命〉の前にすべてが許される如く、自己の前にもすべてが許されるのだ。カミュはいみじくも云う。

《彼の独自性は、革命に身を投じる者には「すべてが許される」ことを冷酷に要求したことであり、また自分自身にすべてを許したことであった》

（『反抗的人間』）

カリャーエフやチャイコフスキー団の人々が熱烈に愛し、信じた民衆に対する視線も、ネチャーエフの裡にあっては、シニシズムの呪縛から抜け出ることはない。知らない人は次の言葉はあの皮肉なボードレールが云ったもの（注6）だと錯覚するだろう。

《民衆が反抗を示すのは、苦痛が限界を越えた場合だけである。したがって革命家はその義務としてこの苦痛をいささかも和らげてはならず、むしろ出来ればこの苦痛をますます耐え難いものにするよう力を用うべきである》

（『革命家の教理問答』）

ネチャーエフに至って、〈革命〉は愛や友情と云う白日の世界を離れ、来るべき〈未来の地上の愛〉は、〈悪〉によって培養される暗室の中で解き放たれる日を待つことになるのである。

そしてかかるニヒリズムの深化と〈悪〉の無限の成熟のもとに、ネチャーエフの〈革命〉は如何なる軌跡を描

いて行ったのか。

バクーニンはネチャーエフに「本状の持参者は世界革命家同盟ロシア部公認の代表者の一人である。第二七七一号」と云う文書を与え、それにはバクーニンの署名があり、「ヨーロッパ革命家同盟中央委員会」なる文字があった。そしてゲルツェンの保管していた「バフメーチェフ資金」の半分をオガリョフから引き出し、ネチャーエフはロシアへ帰った。

ネチャーエフは早速モスクワで革命組織を作ろうと考え、バクーニンの証明書を使い、組織を作り始めた。これらの組織の構成は五人づつから成り、各グループはたがいに知ることなく、ただ上部には中央委員会があり、ネチャーエフに指示を与えるのだと信じていたので、まったく彼の意志次第でどうにもなるようになっていた。これらの組織を彼は「斧の会」と名づけ、学生たちを自由自在にあやつるために、チーフに対する完全服従と云った鉄則を叩き込んだ。ここにおいて、ネチャーエフは今こそ革命家として、〈革命〉の事業に精力的に飛翔して行くかに見えた。だがひとつの〈スキャンダル〉が突き刺さる。それは、学生の一人であるイヴァーノフがネチャーエフに不信を感じ、ネチャーエフの独断専行に対して批判し、さらにはネチャーエフと云う男は一体何者なのか、中央委員会と云うのは本当に存在するのかと云う疑惑を持ち始め、組織は危険な状態となっていった。

そしてここにドストエフスキーの『悪霊』の題材となったイヴァーノフ殺しが起こるわけである。ネチャーエフにとっては、自己は〈革命〉と同一であり、したがって自己の思想、行動こそが真理と認められるのであって、その前に立つ妨害者こそは、〈革命〉の妨害者以外の何者でもない。ここにあの『革命家の教理問答』の「低い能力を持った革命家達はただ消費される資本と見なされなければならない」「ある同志に不幸がおきて、彼に救援の手をさしのべるか否かを決定せねばならない時には、個人的感情を捨てて、もっぱら革命的利害を考慮せねばならない」と云う原則があてはめられる。今イヴァーノフこそはかかる対象である。

ネチャーエフはイヴァーノフを除く四人を殺人に加担させるべく、五人組の一人であるウスペンスキーを訪ねる。その時の様子をルネ・カナックは次のように描写している。

《彼は言った。

—斧の会の目的は会活動を妨害しようとする人間

はたとえ誰であれ、排除しなくてはならないと思うが。

―無論そうだ。

ウスペンスキーは即座に答えた。

―今の場合、我々はイヴァーノフを片付けねばならない。しかも一刻を争うのだ。

ウスペンスキーは驚きのあまり口もきけなかった。

―ぼくの言うのは、イヴァーノフを殺さなければならないと言うことだ。彼に妨害活動をやめさせないうちは我々が大きな危険にさらされている。

―しかし我々に殺人の権利はない。

―それは、他人が「汝、殺すなかれ」と言っているからか？君は社会というものがそんな風にして自分を守っていることに気づかないのか？ぼくは繰返して言おう。これこそ我々の権利であるばかりか、義務であると〉

（『ネチャーエフ』）

そしてイヴァーノフは口実を設けて呼び出され、ネチャーエフはピストルで彼を殺したのであった。

この行為の裡にわたしたちは何を視るであろうか。彼の云う体制の論理からすれば、これは忌むべき殺人以外の何ものでもない。だがネチャーエフにあっては、これは何の矛盾もないのである。彼にはもう前もって、自己＝〈革命〉の前にはすべてが許されると云う命題が確立されているのであって、かかる行為も〈革命〉への過程に他ならないものである。ちょうどカリャーエフが〈テロル〉を行うように。

五日後死体が発見され、学生たちは次々と逮捕されたが、ネチャーエフは犯行の翌日ペテルブルグを経て、ジュネーブへ逃れた。そしてバクーニンに会い、「斧の会」の失敗を単なる一エピソードとして話した。そして彼らは『人民裁判』の二号を出し、またゲルツェンが死ぬとゲルツェンの娘ナタリヤを説いて『鐘』を再刊した。

この時バクーニンはマルクスの『資本論』の露語訳を引き受けて、前金までもらっていたのだが、翻訳に時間がかかり、困難であることが明瞭になったので、ひどくくさっていることをネチャーエフに話した。するとネチャーエフはぼくにまかせなさいと云って、出版業者を脅迫し、翻訳をやらないでもいいようにしてしまった。（注7）

こうしているうちに、バクーニンはロシアから亡命して来たヘルマン・ロパーチンから、ネチャーエフは〈虚

偽〉で固めた男で、逮捕されたことなど一度もないし、自分がそこの密使だと称している委員会なぞ根も葉もない作り話だと云うことを聞いた。そしてここに至ってついに、バクーニンとネチャーエフの間に破局が生じた。ネチャーエフはバクーニンとゲルツェン家が所有する秘密の手紙を盗んで出奔する。すぐ後バクーニンは友人に手紙を書いた。

〈彼が今まで私が会ったうちで、最も活動的で精力的なものの一人であることは本当です。彼のいわゆる「主義」のためには、何事も遅疑逡巡せず、他人はおろか自分をも容赦しません。これが私を引きつけ、そして長い間彼と接触して来た特別の素質なのです。人は彼を山師であると言いますがそれは間違いです。彼は献身的な狂信者であると同時に非常に危険な狂信者なのです。彼と同盟を結ぶことはすべてを破滅へ導き、危険をまねくだけです。

彼は初め、ロシアに存在した秘密結社に属していましたが、全員逮捕されたためもはや存在しておりません。ネチャーエフは独りとなり、そして今日では単身彼のいわゆる「委員会」を構成しています。ロシアの組織が亡びたので、彼は国外で新結社をつくらざるを得なくなり、これはすべて完全に自然、かつ有要なのですが、唾棄すべきはその手段であります。

彼はロシアの秘密結社の崩壊によって、非常な影響を受けました。そして厳粛な不動の組織を作るためにはマキアヴェリの政策を打ち立て、ジェズイットの組織方法ー肉体には暴力を精神には幻影をーを採らなければならぬと徐々に確信するようになりました。真実、相互信頼、真の連帯は結社の神聖殿を占める一握りの者の間にしか存在しない。残りの全体は真に連帯している一握りの者の手で、盲目にそして自由に扱われる道具であると言うのです。残りの全体をあざむき、おとしいれる必要とあらば殺すことさえ許されているばかりか、義務でさえあるのです〉

バクーニンのこの手紙はネチャーエフの性質、特徴をよく捉えている。だがカミュの云うように、〈革命〉が唯一の正義であるとするならば、バクーニンは何ゆえネチャーエフの戦術を忌むことが出来るだろうか。ネチャーエフが〈悪〉を為すのは、自己の欲望からではなく、〈未来の地上の愛〉の実現のためなのだ。「自らを絶望的な革命の残酷な修道僧」として「ネチャーエフは実際革命のためにつくす。彼は自分に奉仕するのではなく、

大義名分のためにつくすのだ（注8）」ネチャーエフはもうとっくに師バクーニンの有限の世界を越えて、新たな世界へと踏み込んでいるのだ。その世界とは〈悪〉と〈革命〉が交差する地平に他ならない。〈革命〉へ至る過程で、彼は〈悪〉を選択することによって、既存の論理、価値感を捨て去り、まったく異なる情念にめざめたのだ。そしてまさに「悪へ向う自由は価値の諸形態へと道を切り開いて行く（注9）」のである。そしてその視線は日常生活までも呪縛し、落下させようとする。バクーニンは書いている。

〈もしも君が彼を友人に紹介すれば、彼はまず君らの間に軋轢と醜聞と陰謀の種をまき、君らを反目させようとするだろう。君の友人に妻なり娘なりがあるとすれば、彼は彼女を因襲道徳の支配から奪い取って、否応なしに社会に対する革命的反抗に巻き込むために、全力を上げて彼女を誘惑し、子供を生ませようとするだろう〉

〈悪〉の過熱は性すらも溶解させずにはおかない。現実のあらゆる局面を、〈悪〉の照射によってすべて解体させることで、民衆を動揺させ、〈革命〉へと赴かせねばならない。だからこそネチャーエフは、生活を根底的に破壊することを志向したのではなかっただろうか。

バクーニンと決裂した後、ネチャーエフはロンドン・パリを経て、再びスイスに戻り、スパイの手にかかって捕えられ、ロシアに送られ、ペテロブルグのペテロ・パブロ要塞に幽閉された。この時ネチャーエフはわずか二十五歳であった。だがまだネチャーエフの物語は終らない。

一八八一年ロシアの革命情況はネチャーエフの時とは異なり、様々な転変を経て、「人民の意志」党によるテロリズムを中心とした闘争へと転位していた。その「人民の意志」党の委員会に、一通の手紙が届けられた。それはもう人々が暗い記憶の裡に忘れ去ろうとしていたネチャーエフからの手紙であった。彼は自ら耐え忍んでいる苦痛には一切ふれず、単刀直入に自分の脱走を提起した。その手紙はいささかの感情の吐露もセンチメンタリズムもなく、自分が四十人もの憲兵や看守を味方につけ脱走の機会をねらっていると書かれていた。しかし「人民の意志」党はその時アレクサンドル二世の暗殺を準備しているところであり、二者択一のジレンマに悩みつつネチャーエフにその裁断を問うた。ネチャーエフは答え

た。「皇帝を打倒せよ！独房の奥から、ぼくの思想は君達と共に行く、ぼくに構ってはならぬ、ぼくは待てる」。

ツアーの暗殺は成功した。だがしかしネチャーエフは二度と脱走の機会をつかむことができず、囚人仲間の密告により、看守たちとの関係も発覚し、恐らくまだ燃えつきぬであろう〈革命〉への情熱をいだきながら、壊血病で死んだと云う。まだその時三十五歳にすぎなかった。

「人民の意志」党の女性革命家ヴェーラ・フィグネルはその自伝の中で書いている。

〈革命運動の中でネチャーエフはまったく例のない人物であった。全期間を通じて二度と現われることのなかった、特別のタイプの人であった。イヴァーノフを殺害したことや「目的は手段を正当化する」という原則を無遠慮につらぬこうとしたことで、どんな不快な記憶が残ったにせよ、彼の意志と性格の強さにはおどろかずにはいられないし、彼のすべての行動に一片の私心もないことは、正当に認められなければならない。彼には名誉心はなかった。革命事業への彼の献身は心の底からのものであり、無限のものであった〉

（『ロシアの夜』）

そして彼に魅惑された兵士たちのことについてもこう書いている。

〈この兵士達の口から、彼らの一生をだいなしにしてしまったネチャーエフに対する非難の言葉を聞くことは一度もなかった。彼らは皆恐怖に似た特別な感情を持って、ネチャーエフのことを語った。そして自分達が彼の意志に従ったことを認めた。「あの人に物を頼まれてことわれるかどうか自分でためしてみるんだね。あの人がじろりと見りゃあ、それでおしまいさ」と彼らの一人は言ったと言う〉

（前掲書）

かかる凄じいネチャーエフの軌跡を支えたものこそ、「パトス」でなくてなんであり得ようか。

〈Ⅲ章への注〉

(1)ネチャーエフをモデルにしたと云われるピョートル・ヴェルホーヴェンスキーがスタヴローギンに向って云う言葉

(2)ネチャーエフの軌跡に関しては次のものを参照

ルネ・カナック『ネチャーエフ』

E・H・カー『浪漫的亡命者』

Franco Venturi〝Roots of Revolution〟
Max Nomad〝Apostles of Revolution〟
Michael Phawdin〝The Unmentionable Nechaev〟

(3)ネチャーエフの生い立ちには様々な説があるが共通するものを採った。

(4)この間に二人は紙幣偽造までもくろんだろう。

(5)これはつい最近まで二人の共作とされていたが、バクーニンのネチャーエフに当てた手紙が発見されるに及んで、ネチャーエフが一人で書いたものとわかった。完全邦訳は三つある。

『マル・エン全集』十八巻、『社会革命の綱領』（麦社）

『ロシア革命』（平凡社）それぞれ所収

(6)ボードレールも似たようなことを云っている。

〈真の聖者とは、民衆の幸福のために、民衆を鞭打ち、殺戮するものだ〉

(7)これが後に、マルクスにバクーニンのインターナショナル除名の口実を与えることになる。

(8)カミュ『反抗的人間』

(9)バタイユ『文学と悪』

Ⅳ　挽　歌

―そしてわたしは……

しっ、静かに！葬式の行列が君の側をとおっていく。君の双の膝こぞうを地面に向って傾けよ、そして野辺おくりの歌を歌いはじめよ。

ロートレアモン

『マルドロールの歌』

ロシアはすでに近代に犯され始めていた。西洋文明は科学と唯物論とをロシアへ伝え、その意識に目醒めたインテリゲンチャ達は、この西洋文明の影響のもとに、ロシアの前近代を否定することによって、ニヒリストとして再生し、ロシアの前近代性を解体し、民衆を解放することによって、近代のロシアへの移植を目ざして、〈革命〉と云う目標を掲げ戦いを続けて行った。その表象としてナロードニキ運動は捉えられるべきであろう。

かかる情況のもとに、わたしが取り上げたカリャーエフもネチャーエフも、〈革命〉と云う〈未来の地上の愛〉の実現のために、その接近過程は背反しても、彼らこそはまさしく〈革命〉と云う「思想のために死ぬほど思想

を肉体化して（注1）」生きた人々であった。

その彼らの軌跡とは如何なる位相のもとに視られるべきなのだろうか。彼らの〈革命〉への献身とは思うに、行為の純粋性に依拠している。彼らは〈革命〉と云う絶対を疑わない。そしてその絶対を不可視の彼方に置くことによって、自らの存在を痕跡づけ、その過程である行為の裡で死ぬことが可能であった。つまり云い換えればわたしが先述したエロティシズムと死の連環の構造を有する「パトス」を完結し、体現しうる存在として彼らの生はあったのである。

したがって彼らの裡にはまだ挫折と云うものはあらわれていない。彼らは確かに自からの死、同志の死、支配者の死に出会ったであろう。しかし彼らの裡で理想として信ずる〈革命〉と云う絶対は、彼らの死の後も生き残り、彼方に横たわっている。永遠の絶対としての〈革命〉が。彼らはニヒリズムの影響のもとに〈神〉を否定し、その換わりに〈革命〉を置いた。そしてあくまで現実の裡に絶対の存在を視ていた。かかる意味においては、彼らの裡にあって絶対の、理想の喪失はあらわれていないのであるし、彼らは近代による思想的影響を受けたとしても、彼らの裡で近代はまだ成熟していないのである。

しかしこのナロードニキの人々が、理想として掲げたひとつの絶対としての〈革命〉が落下した時、そこにはどんな情況が待ち受けているのであろうか。

それは同時代におけるフランスに眼を転じてみれば、ボードレールやフローベルと云った文学者たちの中に見い出すことが出来る。〈革命〉の挫折の後、彼らは現実の裡に絶対を視ることの不注意に覚醒し、ひたすら文学の世界の中で、呪詛する存在として不毛の現実を凝視していた。そしてロシアにあっては、ドストエフスキーこそかかる情況を鋭く洞察し、かかる不毛を自意識の名のもとに解剖し、近代に犯され、なにものかの死に出会った人々を描いた。『地下生活者の手記』の主人公の自意識、ラスコリニコフの行為に対する不安と疑惑、イヴァン、カラマーゾフのニヒリズムの深淵、スタヴローギンのアパティアこそ、かかるナロードニキ神話の後の人間を暗示したものではなかったであろうか。そしてまた実際に〈革命〉運動に参加し、カリャーエフらを指揮してテロリズムを行ったサヴィンコフは、ロープシンとなって〈革命〉と云う絶対を文学の世界の中で凝視し、対決せざるを得なくなった転位こそは〈革命〉と云う絶対の振幅への不安の表象なのではなかっただろうか。そして彼は呟く。

∧わたしはたいくつな芝居小屋から出て行こう。その時、天空に神殿の扉が開かれるだろうが、なおわたしは言うだろう。すべては虚偽であり、すべては空の空であると∨

（『蒼ざめた馬』）

それらはもうすでに、存在と行為との断絶が始まり、「パトス」の完結性が失われ、わたしたちが「パトス」を放射する対象が現実の裡で死んだと云う福音なのである。わたしたちはひとつの理想を信じることによって生きることが出来る。その生きるとはまさに「パトス」の自己完結を云うのだ。それは∧革命∨であっても、∧思想∨であっても、∧愛∨であっても、∧神∨であってもいい。わたしが論じたロシア・ナロードニキの人々、カリャーエフもネチャーエフも、ひとつの理想としての∧革命∨のために生き、殉じ、そして「パトス」を自己完結し得た人間であった。

だがわたしたちはあまりに遠くまで来てしまった。わたしたちが措かれている∧場所∨にはもうすでにかかる神話は成立しないのだ。∧神∨は死に、様々な∧思想∨は宙に散乱し、∧故郷∨は失われ、∧愛∨の神話は萌壊している。そうだ、わたしたちはすでに「パトス」を放射する対象の死に出会っているのだ。そしてただ不在の荒涼たる心象光景だけが横たわっている。

そして残された「パトス」だけが空転し、渇望と苛立ちの中で彷徨し続ける存在は、死に至るまでただ飢餓の叫びを上げる。それをいやすためにわたしたちは何を見い出したら良いのであろうか。何処に求めたら良いのであろうか。そう、わたしは一体何処に。（了）

∧Ⅳ章への注∨

(1) カミュ『反抗的人間』

∧付記∨

個人史の局面にあっては、瞬間と永遠の心象をもって通り過ぎて行く青春の錯乱の中で、ひとつの位置を占めながらいつの間にか後退して行ったロシア・ナロードニキの人々に、わたしはひとつの象を与えようと思った。その欲求こそがわたしにこれを書かせたと云えるだろう。かかる象をとってそれが結実（？）したことについての是非はひとまず問うまい。しかしこれはあくまで私的な精神史における「序説」の位置にある。わたしたちはもう彼らからは遠く離れてしまった。そしてかかる認識からこそわたした

ちは出発しなければならない。わたしにとってバタイユの位置もそこにあるのだし、今こそ死するまでの∧何を∨∧何処に∨探求する決意のもとに果てしなく旅立たねばならぬ。

∧無現の喪失を梯子にして、われわれは存在の勝利を見出すのだ∨（バタイユ）

雑　報

○ 樺太委員会ニュース2号が送られてきた。樺太等旧日本の北方領土に戦後、本人の意志と関係なく残されている朝鮮人の調査と、希望者のソ連政権下からの解放のための訴訟のニュースだ。国家の中の問題だけれども、もしソ連政権下をはなれたいと考えている人々がいるのなら、個人の自由のためにも支援をおしむべきでないだろう。（練馬区関町五の一六九町田方、樺太委員会）

○ 「月刊キブツ」が今度「月刊協同体」に改名しようと思っている、と言っている。又、イスラエルのキブツへの派遣活動を一時中止するともいっている。

日本の親アラブ政策を考慮して、とのことだがくじけることなく協同体思想を発展させ協同体運動を支援していって欲しい。（渋谷区代々木四の五の十四、参宮橋ハイツ十、社団法人日本共同体協会）

○ 詩の雑誌「コスモス」8号がでた。向井孝、高島洋といった人々が書いている。（文京区白山五の三六の八清水方、コスモス社、代金二五〇円）

○ 山鹿泰二、人とその生涯が向井孝さんにより出版された。（大阪市あべの区旭町二の十二の二泉原文化10号向井孝宛、定価六〇〇円）

○ ラジカル英語版が三号まで出ている。これは日本語のものと違い、はしもとさんの日本アナキズムの歴史のようなものものっている。残部はあるので一部あて二〇〇円位の割でバルカン社に欲しい人は申し込んで下さい。（新宿区東大久保一の四六四、松喜ビル、バルカン社）

○ リベルテールの会、火曜サロン

水道橋駅近く、　終着駅二階

電話〇三、二六四、二九四五